

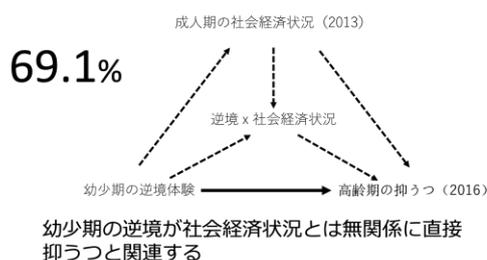
幼少期の逆境体験と高齢期の抑うつを結ぶ経路の7割が成人期の学歴や収入とは無関係

～しかし、学歴や収入に対する介入でその悪影響が軽減される可能性あり～

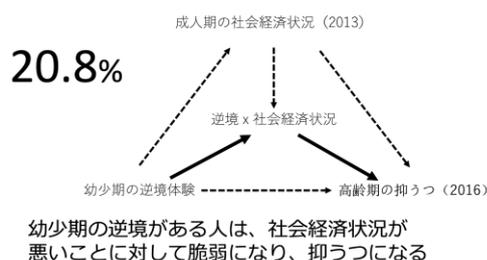
貧困や虐待などの幼少期の逆境体験は、生涯を通じて身体的、精神的健康を低下させることがわかっています。しかし、そうした体験がそのまま不健康につながるのか(経路1)、成人期の逆境体験(例えば低学歴や低収入)の原因となり、それによって健康が損なわれるのか(経路2)、あるいは幼少期に逆境体験がある人では様々な逆境体験に対して脆弱になり、健康を害しやすくなるのか(経路3)、さらにはどちらも起きているのか(経路4)、はつきりとわかっていません。日本の高齢者の大規模データ(n=7,271)を使用し、これらの経路を同時にモデリングし、各経路に分解することができる4-way decompositionという手法を用いて、幼少期の逆境体験と高齢期の抑うつに関連に対して、成人期の社会経済状況(学歴・収入)がどの程度各経路へ寄与するか検討しました。分析の結果、直接効果(経路1)が全体の69.1%を占め、他の経路の寄与分より大きいことがわかりました。一方、成人期の社会経済状況は、それぞれ10.1%程度媒介効果を、26.5%交互作用を介して幼少期の逆境体験と抑うつに関連を説明しました。幼少期の逆境体験は、高齢期の抑うつの強力かつ独立した決定因子であることが示唆されましたが、同時に学歴や収入に対する介入でその悪影響が軽減される可能性も示されました。

お問合せ先: ハーバード公衆衛生大学院 社会行動科学学部
リサーチフェロー 矢澤 亜季 aki.yazawa@gmail.com

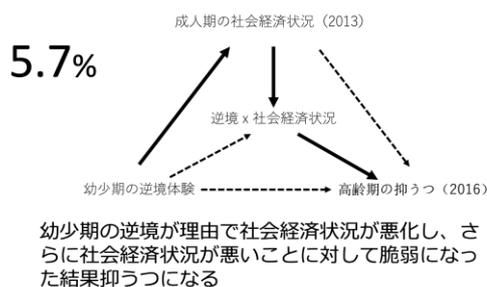
直接効果 (Controlled direct effect)



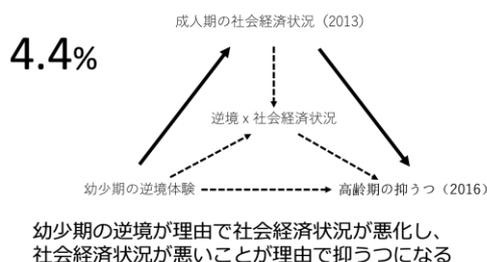
参照交互作用 (Reference interaction effect)



媒介交互作用 (Mediated interaction effect)



純粋な媒介効果 (Pure indirect effect)



■背景

貧困や虐待などの幼少期の逆境体験は、生涯を通じて身体的、精神的健康を低下させることがわかっています。幼少期の逆境体験が成人期の健康に影響するメカニズムに関して、Sensitive Period仮説(成人期の社会的要因とは無関係に逆境体験→不健康)、Social Trajectory仮説(逆境体験→成人期の社会的要因→不健康)、Stress Sensitization仮説(逆境体験が、社会的要因→健康の関連を増強する)などの仮説が存在します。実際には、逆境体験が健康に与える直接効果、成人期の社会的要因による媒介効果、逆境体験と成人期の社会的要因の交互作用が同時に作用していると考えられます。これらの現象を同時にモデリングし、各メカニズムに分解することができる4-way decompositionという手法を用いて、幼少期の逆境体験と高齢期の抑うつに対して、成人期の社会経済状況(学歴・収入)の各経路への寄与分を検討しました。

■対象と方法

日本老年学的評価研究プロジェクト(JAGES)のデータを利用しました(n=7,271)。幼少期の逆境体験は、親の不在、親の離婚、親の精神疾患、家庭内暴力、身体的虐待、ネグレクト、心理的虐待、経済的困窮のうち、二つ以上の経験として定義しました。成人期の社会経済状況が低いことは、2013年のデータを用いて、等価所得(世帯における一人あたりの収入)が200万円未満かつ教育年数が10年未満(中学校卒業まで)と定義し、抑うつは、2016年に老年期抑うつ尺度を用いて評価しました。4-way decompositionを用いて、直接効果、純粋な媒介効果(媒介効果のみ)、参照交互作用(修飾効果のみ)、媒介交互作用(媒介した上で修飾する効果)の4経路に分解し、それらの寄与分を計算しました。その際、年齢、性別、婚姻状況、自己評価の健康状況、就業状況、15歳時の暮らしむき、幼少期の栄養状況の指標である身長の影響を取り除きました。

■結果

直接効果は幼少期の逆境体験と高齢期の抑うつをつなぐ経路の69.1%を占め、他の3つの経路の推定値(参照交互作用20.8%、媒介交互作用5.7%、純粋な媒介効果4.4%)より大きいことがわかりました。成人期の社会経済状況は、それぞれ10.1%媒介を含む経路を、26.5%交互作用を含む経路を介して幼少期の逆境体験と高齢期の抑うつとの関連を説明しました。

■結論

成人期の社会経済状況による媒介は全体の関連の一部(10.1%)を説明するに過ぎず、幼少期の逆境体験は高齢期の抑うつ症状の強力かつ独立した決定因子であるとわかりました。しかしながら、26.5%交互作用が観察されたということは、成人期の社会経済状況、すなわち教育や経済状況に対する介入が行われれば、交互作用を介して抑うつへの悪影響を緩和することができる可能性を示唆するものです。

■本研究の意義

先行研究の多くは、幼少期の逆境体験とその後の健康との関連について、成人期の要因による媒介または交互作用のどちらかに焦点を当てています。本研究では、それらを同時にモデルに組み込むことでこのギャップに対応し、適切な介入方法の検討につながるエビデンスをもたらしました。

■発表論文

Yazawa, A., Shiba, K., Inoue, Y., Okuzono, S. S., Inoue, K., Kondo, N., Kondo, K., & Kawachi, I. (2022). Early childhood adversity and late-life depressive symptoms: Unpacking mediation and interaction by adult socioeconomic status. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*. <https://doi.org/10.1007/s00127-022-02241-x>

■謝辞 本研究は厚生労働科学研究費補助金(H28-長寿-一般-002)などの助成を受けて実施しました。記して深謝します。